

テラカツ!

第一一回 山口県周防大島町・久屋寺

昔から伝承された地域の行事には、その地の寺院が関わっていることが多いです。今回、一度は休止を余儀なくされながらも、伝統芸能を地元の方と共に復活させ、大切に伝えていく、山口県周防大島町の久屋寺さまを取材させていただきました。

—どのような行事でしょうか。

清木師 「なむでん踊り」という、田植えが終わった頃、五穀豊穣を願い害虫を防ぐために、掛け声をかけ鐘や太鼓を鳴らしながら踊る虫送りの行事です。ここ久屋寺で入魂式を行い、町内

各地を巡回し踊りを奉納します。約二

五〇年前に神屋寺（現 久屋寺）七世

大本祐厚大和尚が踊りを考案し、昭和

五一年には県の無形民俗文化財に指定

されました。昔は大人が踊っていまし

たが、大島大橋開通式典（昭和五一

年）に出演するときに、大人に合わせ

新しく子どもの部が結成され、それ以

降は子どもが伝承してきました。

しかし、踊り手の少子化と指導者の高

齢化のため、平成一八年を最後に、町

内を巡回する奉納踊りは休止となりま

したが、平成二七年に復活することが

できました。コロナ禍では害虫退散だ

けではなく、新型コロナウイルス退散を祈り奉納しました。

—どのように関わっておられますか。

清木師 久屋寺の住職は保存会の副会長を務めており、保存会では奉納踊りの日程や保存していくための課題などを協議します。私も子どもの頃に踊っていたので、今は踊りの指導もさせていただきますので、今は踊りの指導もさせていただきますので、歴代の住職で



なむでん踊り



大人と子どもが一緒になっての踊り

踊った経験があるのは、おそらく私だけで、踊りの指導をしたのも祐厚大和尚と私ぐらいだと思います。そういう意味でもありがたいご縁をいただいております。

奉納踊りが休止していたときは、中学校の「地域の伝統芸能を学ぶ」という総合学習で子どもたちに指導してお

りました。単に踊りの振り付けだけを教えるのではなく、踊りの由来や歴史的背景も伝えました。文化祭で発表したいということで、指導させていたこともありません。

―「なむでん踊り」が、復活したときのことを教えてください。

清木師 保存会会長の呼びかけに、子どもの頃に踊った青年たちが「自分も踊った伝承が絶えてしまうのは忍びないので後世に繋ぐためにぜひやろう」と復活しました。子どもの頃に踊った青年たちは、二〇年ぐらい経っても踊りを体が覚えていましたが、振り付けの細かい部分で悩んだりしました。幸いだったのが、それまで指導されていた方から、ご助言をいただけたことです。もし、復活させようとする機運が遅ければ、結成当時の踊りを伝承できなかったかもしれません。また、地域おこし協力隊の方や、伝統芸能に興味がある方、学校の先生など、多くの方

が力をお貸しくいただきました。その結果、一地域の踊りを復活させようという力によって、人と人との縁も広がっていききました。そして、復活を機に青年たちの子ども、その子の友だちも踊りに参加してくれて、今では大人の部・子どもの部ではなく、大人と子どもが一緒になって踊っています。

私も復活時の練習に参加しました。久しぶりに踊ってみると、子どもの頃に踊ったときよりも楽しく感じ「一緒に踊りましょうか」と提案したら「流石に、入魂式を務める住職が踊ったらダメでしょう」となり、「しかしか」という口上で踊りの由来や願いごとを述べる役で参加させていただきました。

―子どもたちへはどのように教えていますか。

清木師 奉納踊りが近づくと、子どもたちの練習日を平日に週二回設けますが、習いごとがある日に重ならないよ

うにするなど工夫しています。無理をさせず、子どもたちに合わせ、楽しく踊ってもらえることを意識しています。三番まである難しい踊りなので、低学年の子どもたちには分かりやすい一番の踊りだけを踊ってもらう、初めての子は旗を持ってもらうなど、可能なことからしてもらいます。そうすると、子どもたちの方から「来年は全部踊ってみたい」「もっと違う役をしてみたい」など積極的になってくれます。あとは、上手くできたときはしっかり褒めること、感動したら積極的に伝えることを重視しています。私も安居から帰ってきたばかりのときに「若いのに頭を剃って立派だ、尊敬する」と褒めていただいたときは、ひどく心を動かされました。同様に、子どもたちに「最高」と声をかけると、こちらの期待以上の力で応えてくれます。子どもたちのパワーは本当にすごいですね。子どもたちが楽しく元気に踊る

と、こちらも元気になる。だから「君たちの踊りは、人に元気を与えている」と大切に語りかけています。そのことを今年の本番で見事にやってくれました。照れくささなどなく、大人の掛け声の方が負けてしまうと思うほどでした。

—そのほかのお寺の行事を教えてください。

清木師 参禅会を行っています。一月の最後の日曜日から、一二月の最初の日曜日まで、毎週日曜日の六時から、坐禅と法話で約一時間。東堂の代に始めて今年で五四年目になります。若い頃は毎週の開催は大変だから、月一もしくは隔週にしようかと考えたこともありましたが、変更しなくて良かったと今では思います。開催する頻度が減ると、そのときに都合がつかない方は、当分間が空いてしまいます。踊りの指導と一緒に、相手に合わせてもらうのではなく、こちらが合わせる。相

手が合わせやすいように、その機会を増やしています。それが大切だと二〇年間続けて分かりました。今は、私が不在のときは東堂に代務をお願いしますが、私と東堂が不在のときでも参禅会は開催できるでしょうね。長い人は東堂の代から四〇年以上続けてこれています。

また、今の子どもたちは日曜日も忙しいので、参加しやすいように、年に数回ほど親子坐禅会を開催したいと考えております。お寺でスポーツ少年団の合宿を引き受けたことがあったのですが、食事のときに、「皆で話しながら楽しく食べるのも美味しいけれど、黙って食材と向き合って食べるのも美味しいよ」と子どもたちに教えると、「すごく美味しかった」と言ってくれました。「ごちそうさま」や「いただきます」の説明には、保護者の方からも「参加してとても良かったです」と言っていたきました。お寺は、日常



なむでん踊りの入魂式

では味わえないことを体験できる、特別な場所だと改めて感じました。
— 今後の課題について教えてください。

清木師 「なむでん踊り」を踊ってくれる子どもたちを増やすことも重要ですが、踊りを観に来てくださる方が徐々に減ってきているように感じます。昔は子どもが多く、二グループに

分かれて巡回できましたが、踊り手・お手伝いの方も少なくなり、巡回する地区も減ってしまいました。「近くだと観に行けるけど、遠くなると難しい」そういった高齢者の方もいらっしゃるので、それも原因の一つと思います。踊り手・指導者・お手伝いの方の減少。そして観に来てくださる方の減少。これは、お寺が抱えている問題点と重なっていると思います。

お寺に伝わっている昔からの法要などの行事も参詣者が減少しています。お参りいただくために、先ずはお寺をもっと身近に感じていただきたい。今の私にできることは、お寺に来ていただく機会を増やすこと、そして何よりも関わってくださる方を増やせるように努めること。そう考え、二ヵ月に一回は行事を企画しております。（法要は一月と七月、写経会は三月と九月、法話会は五月と十一月）
また、最近兼務住職となったお寺で

は、法要前のお掃除などを檀信徒の方が積極的に協力してくださいます。先代ご住職が、一人ですべてやるのではなく、任せられることは任せてお願いしてこられた結果だと感じています。人にお願いできるという繋がりが、地域との関わりを構築し続けることが、伝承の基礎になるのだと思います。

（聞き手・文構成／全国曹洞宗青年会
副会長 宮本昌孝）

プロフィール

久屋寺 住職 清木隆法師

昭和五二年生まれ。四六才。愛知学院大学卒業後、大本山永平寺で安居する。平成一六年久屋寺住職となり、令和三年からは法心寺、眷龍寺の住職も兼ねる。平成二五年からは四年間、山口県曹洞宗青年会の会長も務めた。寺院活動に留まらず、ソフトボール少年団の父母会長を務めるなど、地域の様々な場面で活躍している。